雪の日

今年に入って、東京では二回雪が降った。雪が降って、あっ、と思ったことが、このたびは二つほどあった。【最初の「あっ」は、名古屋に住む友人からの電話がもたらしてくれた。

「今ね、雪が降り始めたよ」と友人は言ったのだ。「今年、はじめての雪」

寒い日だったが、東京では雪は降っていなかった。そうか、東海地方は雪か、と思いはしたが、①よそごとである。しばらく世間話をしてから、電話を切った。

ひさしぶりに街に出て映画でも見ようかと思って、そのあとすぐに家を出た。寒い。名古屋は雪、とつぶやきながら、襟をたてて歩く。見たい映画をやっていなかったので、本を二冊買って、本屋を出たところで、雪が降り始めた。

②あっ、と思った。名古屋の雪が、東京までやってきたのである。名古屋は、ここからはずいぶん遠い場所だと思っていたのに、ほんとうはそんなことはなくて、日本という土地の中の地続きで、小一時間ほどで雪を降らせる雲も張り出してくる。あたりまえのことなのだが、ふだんは忘れている。ここ、今自分のいる場所だけが世界だと思いこんでいる。それ以外の場所は、違う次元の場所のような気がしている。でも、そうじゃない。私のいるここは、私のいないあそこにつながり、さらに遠いどこかにつながっている。それを知って、あっと思ったのだ。

同じ日、すっかり夜も更けたころ、一人で外に出てみた。長靴をはいて。しんとしている。チェーンを巻いたタイヤの音が、遠くからかすかに響いてくる。電線から、ときおり雪のかたまりがぽたりと落ちる。長靴をはいた足を、まっさらの雪の中に踏み出してみた。一歩。また一歩。柔らかい雪が、小さなふきだまりのように積もっている場所がある。両足で、ぽとんと乗ってみた。

沈んだ。

あっ、とまた思った。沈んだ。そりゃあ、沈むだろう。私の体重はけっこう重い。でも、ふだんは自分に重みがあることなんか、忘れている。アスファルトや床を踏んでいるときは、自分に重さがあって、それらのものが自分の重さを支えてくれているなんていうことは、忘れているのだ。③それを、思い出させてくれた。ひさしぶりに積もった雪が。面白かった。そして同時に、いわれのない、そこはかとない不安も、感じた。】

*自分のいるここが遠くにつながっていることも、自分に重さがあることも、当然のことなのに、ふだんは忘れている。忘れているうかつさと、忘れていられる安らかさを、雪が教えてくれたのであった。

今年、あと何回、雪は降るだろう。

（川上弘美『ゆっくりさよならをとなえる』新潮社　所収「雪の日」による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 【 】の箇所を大きく二つのまとまりに分けたとき、二つ目のまとまりはどこから始まるか。二つ目のまとまりの最初の三字を答えなさい。

(2) ——線①「よそごとである」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 友人が住む東海地方で雪が降っているならば、自分が住む東京でも雪が降ると予想できるということ。

イ 友人が住む東海地方で雪が降っているので、自分が住む東京がこれほど寒いのも納得できるということ。

ウ 友人が住む東海地方で雪が降っていても、自分が住む東京の天候には関わりのないことだということ。

〔　　〕

(3) ——線②「あっ、と思った」のはなぜか。解答欄に当てはまる言葉を＊の段落から十八字で探し、書きぬきなさい。

名古屋の雪が東京までやってきたことから、

というあたりまえのことに気づかされたから。

(4) ——線③「それを、思い出させてくれた。ひさしぶりに積もった雪が。」とあるが、この部分でもちいられている表現技法として適当なものを選びなさい。

ア 体言止め　イ 倒置　ウ 対句

〔　　〕